

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 花谷 厚

論 文 題 目

サブサハラ・アフリカ社会における開発介入に伴うコモンスの成立促進要因に関する研究ーセネガルの村落給水管理組織を事例としてー

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	宇佐見晃一
委員	名古屋大学	教授	山田 肖子
委員	名古屋大学	教授	伊東 早苗

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

アフリカ社会は、多種多様な開発介入によって資源が導入されたにもかかわらず、その管理が持続的でないという課題を抱えてきている。本研究が扱うサブサハラ・アフリカのセネガルにおける村落給水施設は開発介入によって導入された資源であり、同資源の持続的運営・維持管理に対して様々な手法（例えば、国家管理から住民管理への移行、技術的アプローチ、住民啓発アプローチ、需要対応アプローチ）が試みられてきたにもかかわらず、現在でもその実現は課題のままである。本論文では、村落給水施設という資源がコモンズ論で扱う共用資源（Common Pool Resources）であると位置づけ、村落給水施設に対する利用者の継続的関与の欠如＝共用資源管理に伴う協調行動に対するただ乗りという問題意識を明示して、「村落給水施設を巡る協調行動を促す要因を明らかにする。」という研究目的を設定している。サブサハラ・アフリカの村落給水施設の持続的運営・維持管理の問題に対してコモンズ論の視点から接近することは、学術上・開発実践上ともに限られており、大きな意義がある。

本論文は7つの章から構成されている。序章は問題意識、研究目的、研究の意義、章節構成を説明している。

第一章は、村落給水管理分野における研究文献の批判的検討に基づいて、検証すべき2つの仮説を提起している：仮説①共用資源管理に関わる利用者の協調行動の成否は、介入要素や偶発的状況要素などの客観的条件によって直接左右されるのではなく、これらの影響の下に形成され、利用者の費用・便益認識に直接影響を与える参照情報に依存する。；仮説②共用資源管理に関わる利用者の協調行動は、協調行動採用の結果として得られる便益が、資源利用及び他者との関係上、正味で正となることが期待できるような参照情報が利用者認識において存在する場合に、その実現可能性が高まる。協調行動という切り口から資源管理に接近し、因果関係を参照情報という視座で解析するのが、本研究の特徴である。

第二章は方法論の概説を意図しており、研究対象国である（西アフリカの）セネガル、村落給水施設の種類（動力式給水施設とハンドポンプ式給水施設）、事例地域の選定理由、本研究が採用した調査方法（質的調査と量的調査）と定量的分析手法である二項ロジスティック回帰分析を説明している。質的調査は仮説①に関係して実施され、比較分析によって、協調行動に関わる因果関係構造の媒介変数として位置づけられる参照情報が仮説的に同定される。一方の量的調査は仮説②に関係して実施され、定量分析によって、「水料金支払い：協調行動」と「参照情報」の統計的関係を検証する。

第三章は現場理解を意図しており、セネガルにおける村落給水分野全体と給水施設の管理体制・制度の特徴を概観し、量的調査の対象である動力式給水施設設置村落 30 カ村とハンドポンプ式給水施設設置村落 10 カ村での聞き取り調査に基づいて、村落給水施設及び運営・維持管理

論文審査の結果の要旨

の具体的実態を把握している。これらの実態の整理と比較を通じて、各村落における運営・維持管理状況や利用者の水料金支払い認識を先行研究が明らかにした促進条件で一律に論じることの危うさ（限界）を確認している。

第四章と第五章は本論文の核となる実証的研究の成果を論述する章である。第四章は最初に参照情報を構成する具体的内容を作業仮設（3つの領域：便益に関する情報、費用に関する情報、規範・割引率に関する情報。6つの可能性：利用資源の非代替性、将来便益の実現可能性、ただ乗りの制裁可能性、共有規範の適用可能性、他者行動の信頼可能性、資源利用に対する長期的関与の可能性）として設定し、事例に基づいた比較分析を行っている。まず水料金支払い・徴収水準における差異が事例間及び同一事例内の異時点間で確認されることを根拠にして、仮設①の前半部分が支持されることを検証し、さらに協調行動結果と参照情報の評価結果を事例間及び同一事例内の異時点間の比較によって、協調行動結果の変化や差異が「資源の非代替可能性、協力便益の実現可能性、ただ乗りの制裁可能性、他者行動の信頼可能性」という4つの参照情報の変化や差異に帰属することを根拠にして、仮設①の後半部分が支持されることを検証している。協調行動と参照情報の間に因果関係があることを判断している。第五章は第四章によって同定された4つの参照情報と協調行動としての水料金支払いとの関係について、動力式給水施設設置村落（タンバクンダ州）10カ村200世帯の聞き取り調査によって収集したデータを用いて、二項ロジスティック回帰分析によって定量的な検証を行っている。回帰分析の結果、6つの可能性のうち、統計的に有意な参照情報として利用資源の非代替性、将来便益の実現可能性、他者行動の信頼可能性の3つが同定され、仮設②が支持されることを検証している。

終章は第四章と第五章の実証的分析結果に基づく結論、政策的提言、今後の研究課題から構成されている。

本論文の第四章は学術誌 *Forum of International Development Studies*（国際開発研究フォーラム）に、第五章は学術誌 *Water Policy* に研究論文として掲載されている。

2. 本論文の評価

本論文は、以下の点において、コモンズ論研究への学術的貢献として評価できる一方、導かれた知見の開発現場への実践的貢献は高い評価に値する。

①2000年代初頭に全米研究評議会が行ったコモンズ論研究の総括の中で強調された重要な課題である「協調行動の因果関係」に取り組んだ挑戦的研究である。主要な先行研究が概念として整理してきた『協調行動の因果関係モデルを構成する「より限定された変数」』について、定量的検証によって、媒介要素と言われる参照情報として具体的に裏付けた。

②質的研究、量的研究のどちらか一つを採用するこれまでの研究手法と比較すると、質的調

論文審査の結果の要旨

査に基づく比較分析によって仮説を検証しながら変数を同定し、同定された変数を取り込んだ量的調査に基づく定量分析によって仮説を検証する姿勢は、横断的手法として評価に値する。

以上のように、設定した研究目的を十分に達成し、博士論文として評価できるが、以下のような若干の問題点を含んでいる。

①参与観察や質的調査（半構造化面接法）に基づく記述的説明の詳細性に比較して、定量分析に採用された変数（参照情報、客観的条件）の種類と計測法は必ずしも十分ではない。さらに、本論文が協調行動の異時点間の変化を指摘しながら、定量分析においてそれを反映する変数の工夫が見られない。

②コモنز論における実証的知見の蓄積という貢献がある一方で、コモنز論を更に発展させるという意味でのフィードバック的貢献が不十分である。

③セネガル国内の多様性を考えると、見出された知見の国内他地域における適用性の限界は否めない。

④データ欠損という理由でハンドポンプ式給水施設に係る定量分析は実施できなかったと説明しているが、同じ給水施設でありながら、動力式、ハンドポンプ式という資源的属性の違いに帰属する協働行動の形及び差を捉える配慮が不十分であった。

これらは、今後の研究の発展のための課題であり、本論文の博士論文としての価値を損なうものではないと判断された。

3. 評価の結果と判定

以上の評価に基づき、審査委員一同、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。